

東京大空襲 救護隊長の記録

久保田重則著

東京空襲 護隊長の記録

久保田重則著

城區開跡 ■ 凡
城區失火火勢 ■ 例

潮出版社

久保田重則（くぼた・しげのり）

1917年（大正6年）大分県に生まれる。満州医科大学卒。

44年陸軍軍医学校に勤務。翌45年にかけて、東京空襲下で救護活動にあたる。

終戦後、国立小倉病院外科勤務を経て、55年国立武雄療養所長となる。その間、53年に「癌の発育に関する研究」で九州大学より医学博士の学位を受ける。

65年国鉄新鶴見診療所長となり現在にいたる。

東京大空襲救護隊長の記録

初版印刷 1973年2月10日

定価550円

初版発行 1973年2月25日

著者 久保田重則

発行者 島津矩久

発行 株式会社 潮出版社

〒160 東京都新宿区南元町14の1

電話 (357) 7111 振替 東京 61090

印刷／大文堂印刷

製本／東京美術紙工

© 1973 Shigenori Kubota Printed in Japan

序 文

悲惨からの告発

東京空襲は都民皆殺し空襲です。戦争が罪のない市民に無差別に襲いかかった稀有の暴挙です。同じアジアの一角において、多くの人々が、アメリカ政府のおよそ常識では考えられない蛮行によって、傷つき、倒れてきたことを思うと、私は、二十八年前の傷が年月によっても少しもいやされることなく、逆に、今日のことのように激しく痛むのを感じます。

しかし、どういうわけか、この「悲惨な傷の記録」がいままであまり編まれておりません。編み手がいらないのではなく、東京空襲の被害者自身が重苦しく沈黙してきたからでしょうか。

そうだとするなら、この沈黙は悲痛です。おそらく、あやまちを犯した国家が、そのあやまちを必ず正す日を、その良識を、根気強く信じたからです。

しかし——日本の動きは、いよいよそういう良識と期待から遠ざかっています。平和を切実に願う多くの人々が、黙々と積む石はつぎつぎと崩され、血と怒りと悲しみの傷口は、あらわにひき裂かれています。

『東京大空襲救護隊長の記録』は、一瞬のうちに生命を奪われ、傷ついた多くの市民の怒りと悲しみを、ありのままに再現した貴重な記録です。戦争への無限の憎しみと、犯したあやまちを煩冠りし、その上、さらにもう一度同じあやまちを犯しかねない日本の動きへの告発の意味でも大いに意義があります。

私は都政運営の基本を、あくまでも弱者の擁護におきます。この本に心から共鳴します。

一九七三年一月二十六日

東京都知事

美濃部 亮吉

目次

序文

美濃部亮吉

1

第一章 本土空襲はじまる

7

遙かな飛行雲 米空軍の日本爆撃計画 中国基地からの日本爆撃 サイパン
陥落と首都防衛計画 サイパンより本土偵察 特別攻撃隊の編成 B 29の本
格的来襲 米艦載機の関東地区来襲 始まった皆殺し作戦

第二章 三月十日の惨状

41

B 29出撃開始 都内の火災発生状況 落とされた焼夷弾 焰の海を逃れて
凶器となった焼けトタン

第三章 焰の海と死体の山

救護班の出動 生と死の間 火傷の治療 きれいな空気がほしい！ 暗夜
に見出した一灯

73

第四章 大空襲の爪跡

ショックさめぬ負傷者 教えられた医道の基本 患者を何とか助けたい！
九死に一生の奇跡 あゝノ非情 戦争とその原因

103

第五章 生への闘い

ベニシリンの開発 重症老人 生きつづけてほしい！ 破傷風血清 延々
とつづく作業 苦悩の夜 徒労に終った努力 戦争と医道 欠けていた科
学的調査

129

第六章 焦 土

患者の心理と運命の明暗 たのもしかった看護婦さん 心痛めた焼跡現場の惨

173

状　和戦の決定は一握りの権力者で　吾妻橋へ　乾燥血漿の開発　折れた
注射針　脳軟化症の父の死

第七章　民衆の悲痛な叫び……………213

若き軍医のとまどい　窮余の策、頸動脈圧迫麻酔　老巡査と娘　深刻化する
食糧難　土色の顔　祈る気持ちで送った姉弟　戦災孤児　民衆自身で決ま
る戦争と平和

第八章　新しい時代へ……………237

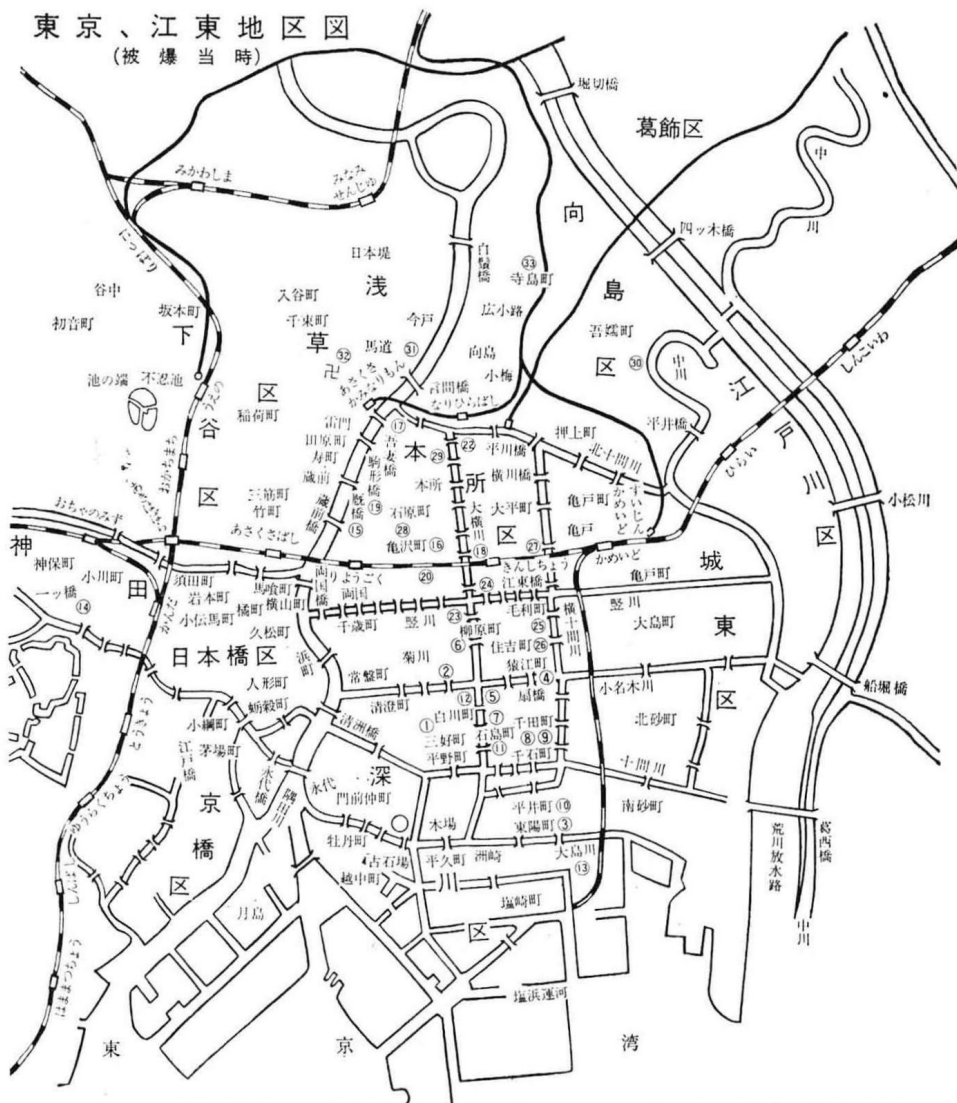
救護班の撤収　悪戦苦闘の死体処理　ずさんであった空襲の資料　胎動
あれから二十七年

参考資料一覧……………253

あとがき……………257

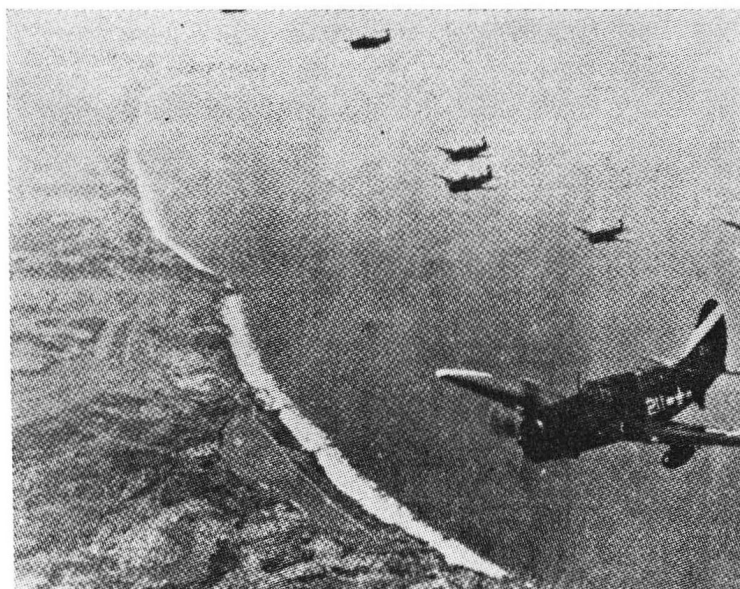
東京、江東地区図

(被爆当時)



- | | | | | | |
|--------|-----------|-----------|----------|-----------|---------|
| ①深川区役所 | ⑦扇橋国民学校 | ⑬東京汽車会社 | ⑲長崎橋 | ②⑤都立第3中学校 | ⑳隅川国民学校 |
| ②大富橋 | ⑧城南国民学校 | ⑭東部軍司令部 | ⑲波賀記念堂 | ②⑥毛利国民学校 | ㉑隅田公園 |
| ③東陽公園 | ⑨都立化学工業学校 | ⑮本所区役所 | ②⑥緑国民学校 | ②⑦橋工公園 | ㉒浅草寺 |
| ④小名木川橋 | ⑩東陽国民学校 | ⑯本所国民学校 | ②⑥双葉国民学校 | ②⑧錦糸公園 | ㉓寺島国民学校 |
| ⑤扇橋 | ⑪石島国民学校 | ⑰大日本ビル | ②⑥平川橋 保線 | ②⑨双葉国民学校 | |
| ⑥菊川橋 | ⑫元加賀国民学校 | ⑱吾妻橋ビヤホール | ②⑥菊川国民学校 | ②⑩横川国民学校 | |

第一章 本土空襲はじまる



房総半島から東京へ向かう米空母艦載機

遙かな飛行雲

米空軍の長距離爆撃機 B 29 数機は、いま、私たちの頭上を無気味に旋回している。爆撃の音は聞こえるが、まだ、私たちのいるビルの付近には、一発も投弾していない。

澄み切った冬の高空に、飛行雲の美しい曲線を描きながら、透き通るような銀色の機体を輝かせて、悠揚と東京の上空二万メートルを飛びつづけている。

一九四四年（昭和十九年）十二月二十七日、この日午後、B 29 五〇機の編隊は、いつものコースである伊豆半島を北上して、富士山の北で進路を東に転じ、大月、八王子と、ほぼ国鉄の中央線に沿って進み、三鷹付近にある中島飛行機の武蔵工場を空襲した。

さらに一部は板橋、中野、杉並、王子、葛飾、麴町、日本橋、京橋、芝区など都内の広い範囲に投弾したのである。

記録によると、B 29 のいつもの脱出路にあたる、葛飾区本田の宝木塚付近は、六四発の爆弾が投下され、練馬区向山町には、爆弾一〇発、焼夷弾二二発が投下された。

その結果、都内での死者は四二名にのぼり、重軽傷者九一名を出し、一一九戸の家屋が破壊された。各地の対空陣地はいっせいに砲門を開いたが、B 29 の高度は、高射砲の射程を大きく超えていたの

であろう、砲弾は、かなり低いところで炸裂しているように見えた。

そのうちに日本の戦闘機が一機、反撃の体当たりを敢行した。瞬間、戦闘機は火ダルマとなって大空に黒煙の尾を引きながら墜落していった。

しかも相手のB 29は、何事もなかったように、細く白い煙の尾を引いて飛びつづけ、視界から消えていった。

屋上でこの様子を見ていた私は、まもなく地上に激突するであろう、あの戦闘機操縦士のことを考えながら、暗い気持ちで、半地下室になっている、階下の救護室に降りていった。

そこは、陸軍軍医学校が派遣した救護班で、軍医は私一人、衛生下士官一名、兵五名の編成で、場所は、葛飾区本田付近の小さなビルである。

窓の上半分は、地上に出て、下半分が地下になっていて、窓際には、このビルに勤めている人たちのものであるうか、梱包した行李が一行にギッシリ積み重ねてあり、爆風を防ぐにはちょうどよい防壁になっていた。

部屋の真中に、机を置き、その上に白い大きな覆布をしいて、救護の準備をしながら、誰もが頭上の爆音に耳を澄ませている。しかし、高高度のため、救護室では、爆音は聞こえない。

室内には、重苦しい沈黙が流れ、皆の注意は、頭上の敵機に集中している。

その時、シューッという耳を裂くような、強烈で鋭い音がした。「伏せっ」という私の声に、はじかれるように皆が伏せた。

轟然たる至近弾の衝撃は、金網の入った分厚い窓ガラスを粉碎し、廊下との境のドアを吹き飛ば

して、室内は蒙々とした砂塵と瓦礫にうずまった。

しばらくすると、その中から、皆むくむくと起き上がった。「大丈夫か」と叫ぶと、全員が元氣よく応えた。

机の上に置いてあった衛生材料は、机ごと吹き飛ばされて、部屋の隅で覆布と一緒に砂塵にうずもれていた。出しておいたガラス器具は全部壊れたが、幸いなことにまだあまり行李から出していなかったもので、半分くらいのものは助かった。大急ぎで、机を起こし、残った衛生材料を並べ、ピンセットや鉗などをアルコールで拭いているうちに、建物の内外から負傷者が押し寄せた。

頭部、顔面、胸、手、足と、全部が爆弾の破片や爆風で飛び散ったガラスなどの創である。

救護班員は夢中になって治療をつづけている。ふと見ると、せつせと負傷者の治療をしている山田一等兵の背中は、血でベッタリ濡れて、なお上衣の下から血がしたり落ちていた。

「山田どうした」と怒鳴ると、彼ははじめて、自分の背中の創に気づいたらしい。

ぼろぼろになっている上衣を脱がせてみると、比較的窓際から離れて伏せていたためか、爆風で飛び散った窓ガラスの破片を背中いっぱいに浴びている。

何十個入っているか見当がつかない。ピンセットで探って、触れるだけ取り出して、リバノールガーゼをおき、その上から厚くガーゼをあてて、背中から胸へとかく包帯をしてやった。「とどまっ、て、救護をしたい」と頑張る彼を叱り飛ばして、軍医学校に後送した。

その後、ビルの裏に造られていた防空壕にけが人がいるという連絡を受けたので、私は衛生兵一人をつれて飛び出した。見ると、防空壕は直撃を受けて、中に入っていた消防団員六名は、全員体を無

惨に引き裂かれて周囲に飛び散り、まったく見分けのつかない状態で死んでいた。

これが、東京空襲で私が体験した最初の救護活動である。これを期に、爆撃はますます激しさを増し、まもなく三月十日の大空襲を迎えることになる。

その空襲は、いままで経験したり、考えていたものとはまったく異質のもので、日本の運命はこの日事実上決まったといつてよい。

米空軍の日本爆撃計画

日本本土の爆撃計画は、すでに、一九四〇年（昭和十五年）頃、当時のアメリカ大統領ルーズベルトのもとで着々と進められていた。

一九四〇年十二月、国務長官ハルも、B17爆撃機による、アリユーション基地からの東京爆撃を主張していた。

だが、ヨーロッパ戦線でのドイツの猛威は日増しにつのり、できるだけ多くのB17を英国に送らねばならない事態が起きたため、これらの考えはすべて後回しにされた。とはいえ、日本本土への報復爆撃は、真珠湾奇襲いらいアメリカおよび連合国の間で熱望されていたのである。

開戦当初の日本軍の進撃はすさまじく、わずか四、五か月の間に、マレー、フィリピン群島、ジャワ、スマトラから南太平洋諸島におよぶ広大な範囲を制圧するにいたった。

その結果、連合国側はこうした苦境に立たされながらも、かねてから熱望していた、日本空襲の第一弾をついに投じた。これが一九四二年（昭和十七年）四月十八日、ジェームス・H・ドゥリットル中佐の指揮するB25による東京初空襲である。

一六機の陸軍双発爆撃機は、東京の南一二〇キロの海上で、空母ホーネットから発進して、東京、川崎、四日市、名古屋、神戸などに急襲の爆撃を行なった。

開戦以来連日の捷報に酔っていた軍首脳を初め防空陣は完全に虚を衝かれ、この一六機に対して、ついに効果的な打撃を与えることができず、白昼、都民注視の中で、全機を国外に逸する結果となった。日本側の損害は、「軽微」と発表されたが、それでも死者五〇名、負傷者は四百数十名におよび、全壊、全焼家屋百数十戸、半壊、半焼家屋数十戸の被害であって、決して軽微といえるものではなかった。

この空襲がアメリカおよび他の連合諸国に与えた精神的な反響は大きかった。それに引き替え、日本の戦争指導者の狼狽ぶりは、はなはだしく、東部軍は九機撃墜と発表したが、事情を知った都民の失笑を買い、あわてた大本営は、のちに、大本営発表を行なったが、戦果については、触れなかった。この頃から、軍の発表は、しだいに戦果を誇張し、損害はことさら陰蔽する方向に傾斜していった。

一九四三年一月、モロッコのカサブランカでルーズベルトとチャーチルが会談して、戦争指導の最

高方針を協議したが、この時、米参謀総長マーシャルは、日本の工業は、空爆に対して非常に弱いので、強力な爆撃によって、日本の戦力は破壊し得る、と述べて、基本的に承認された。

その頃、アメリカでは、日本を空襲できる長距離爆撃機B 29の開発が、あらゆる困難を克服してつづけられていた。総重量四万四一〇〇キログラムでB 17の二倍以上もあるにかかわらず、速度はB 17より三〇％も速く、しかも発動機の馬力は、わずかに八三％増という条件が要求された。

これには、翼面の空気抵抗の少ない、細く長い翼が必要であり、このために起こる非常に高速での着陸の安全を保障するために、航空力学上の大きな壁を越えなければならなかった。さらに高高度に耐える塔乗員室の与圧装置の設計、またこれが被弾した場合の処置、ガソリン・タンクが被弾した場合の対策、塔乗員室の装甲の問題など、難問題は山積していた。

これらの困難を克服して、一九四二年（昭和十七年）九月九日、ついに試作第一号機が完成した。しかし、一号機の発動機は相次いで故障を起こし、改良試作二号機も発動機が火を吹いて墜落、優秀なテスト・パイロットを含む塔乗員一〇名は全員死亡した。また試作三号機も試験飛行中に大破する事故を起こし、その後も事故は続発した。このようにB 29開発への道は、まったく惨憺たるものであったといえる。

このなかにあって、欧州情勢の緊迫と、日本の異常な進撃はつづいたのである。これに追われて米国首脳は、まだB 29の試作一号機もできていない一九四一年暮、ボーイング社に対して、B 29五〇〇機の発注をした。事態の急迫に対して、いかに米首脳があせっていたかがうかがえるであらう。

彼らの期待のうちにできたB 29の性能諸元は次の通りである。